横光利一「上海」論の試み（二）

――〈参木〉の彷徨と〈日本〉意識の変遷――

田口律男

はじめに

横光利一の第一長編小説「上海」は、故芥川龍之介の示唆による昭和三年の約一ケ月の上海滞在を直接のきっかけとして生みだされたわけだが、もちろん、それまでに横光が主体的に展開してきた新感覚派文学運動の直接延長上に結実した作品であることも忘れてはならない。横光は、新感覚派文学運動において、関東大震災以後、いやおうなく現出しつつあった近代都市の底辺で、行動原理や生活信条を喪失したまま、出口を捜し、蠢めいている現代人の存在のありようを、〈悟性〉と〈直観〉とを駆使した、〈物自体に躍り込む〉(注1)新感覚主義文体で、執拗に追究していた。その結果として、〝〈街〉もの〟と呼んでもさしつかえない一連の作品群が生みだされたわけであるが、その〝〈街〉もの〟で、横光が到達しつつあった地平とは、おおよそ次のようなものであった。

たとえば、作品「街の底」（大14・8）を例にとって述べるならば、横光は、ここで、現代都市の内部に蔓延する極端なる貧富差、階級差、都市公害、〈銅貨〉に支配・決定される資本主義の実態、等を、〈生活〉から奇妙に乖離してしまった精神を病める青年の眼を通して描き出したのであった。こうした横光の文学実践は、当時、次第に顕現化しつつあった知識人のアイデンティティの危機という事態を、一歩つきつめて認識化し、問題の所在を闡明するとともに、現代社会の矛盾に対して、あくまでも文学の問題としてコミットするという、プロレタリア文学とはまた異なった別の積極面を持ちあわせていた。しかし、そこで、問題を解決しえたというわけでもなく、この問題は、以後、横光の作家的主題として、〝主体回復〟の試みといった形で、追究されていくことになるわけである。

長編小説「上海」は、その一つの結節点となる作品で、〝〈街〉もの〟で辿りついた認識の塊りを内包しながらも、更に、政治・経済・民族の集中的交錯をみる国際都市・上海を舞台に得て、長編小説にふさわしい様々な思想的立場や人間存在のありようを登場させて、問題を根底的につきつめていった作品ということができるのである。

作品「街の底」では、〈彼〉なる人物が、拠って立つべき存在基盤を求めて、〈街の底〉を彷徨していた。「上海」においては、〈参木〉なる人物が、それに代って彷徨している。参木は、激動の国際都市・上海を漂泊し、次第にその底辺へと沈み込みながら、問

題を根源へ向かって先鋭化していく。本稿では、「上海」の主人公である参木に焦点を絞り、彼の彷徨の内実を探り、彼がどこに足をおろそうとしているのか、また、それが〝主体回復〟の試みとしてどのような意味を持ち得るのかを検索してみたいと考えている。

一

まず初めに、基本的な作業になるが、参木のプロフィールを描くところから始めよう。彼の人物像や立たされた磁場を知ることは、本稿のテーマと密接に関わってくると思われる。目につく情報を拾い集めると、まず、参木は、〈白皙明敏な、中古代の勇士のやうな顔〉を持ち、友人達からは、〈不可解なドン・キホーテ〉と呼ばれる青年であることがわかる。〈不可解なドン・キホーテ〉と呼ばれる所以は、参木が、〈道徳〉や〈愛〉といった理念を、彼の行動規範に据えていて、周囲の人間達とうまく協調できないところが見受けられるからである。たとえば、それは、対女性関係において、最も明瞭にあらわれている。参木は、不器用なまでに、一人の女性（競子という名で、すでに他の男性と結婚し、日本に住んでいて不在である。）を想い続け、自身の〈愛〉にこだわり続けようとする。そして、〈ただ競子をひそかに秘めた愛人であつたと思つてゐたばかりのために、絶えず押し寄せて来る女の群れを跳びのけて進んでゐたドン・キホーテ〉ぶりを演じているといった具合なのである。また、参木に無償の好意を寄せるお杉という女性に対しても、ほのかな愛情を感じつつも、〈競子の顔を見るまでは、お杉の身体に触れてはならぬと思つてゐた。もし彼がお杉に触れたら、彼はお杉を妻にして了ふに定つてゐると思ふのだ。（中略）彼は何よりも古めかしい道徳を愛して来た。此の支那で、性に対して古い道徳を愛することは、太陽のやうに新鮮な思想だと彼には思ふことが出来るのだ。――〉というふうに、自己規制と自己合理化とを図り、アイデンティティを保持していくタイプの人物なのである。このように、自身の〈愛〉とか〈道徳〉といった規範意識を執拗に抱きつつ、それとは全く変質してしまった頽廃と享楽の現代都市・上海を生き延びようとしている存在が参木であることを、ひとまず押さえておく必要があるだろう。

この〈中古代の勇士〉・〈ドン・キホーテ〉・〈古めかしい道徳〉・〈愛〉といった徴表は、もう少し抽象度をあげると、共同体（ゲマインシャフト）的存在ということにもなる。すなわち、〈道徳〉や〈愛〉を至上のものとして掲げ、兄弟盟約的な人間関係のなかで、自己を保持していくタイプの人間である。また、そこまで抽象化しなくとも、横光文学の習作期、あるいは新感覚派文学以前の作品を見ていくと、そこに登場する人物は、その多くが、こうしたゲマインシャフト的なタイプであり、とりわけ、かなえられぬ〈愛〉の純粋性や相互補償性への渇望が色濃いように見受けられる。が、それは、今は措くとして、そうしたタイプの人間が、ここでは、どういう磁場に立たされているかを、次に少し見ておかねばならない。

参木は、上海に渡ってから、〈十年日本へ帰つたことがな〉く、その間、〈常緑銀行〉という日本資本系列の銀行に勤務していた。しかし、そこでは、〈銀行の格子の中で、専務の食つた預金の穴をペン先で縫はされてゐただけ〉で、自身の労働が、単に、〈他人の不正を正しく見せ続ける努力にすぎない〉結果に陥っていることを

思いしらされている。この〈専務〉の〈不正〉行為は、単なる一回性の特殊現象というよりは、国際金融市場であるこの上海の表面下に深く潜行する、資本主義そのものの〈不正〉と腐敗というふうに把握されねばならないだろう。それは、〈巨万の富を摑んでみせる〉と豪語する友人の甲谷の発言や、地下で〈人骨製造会社〉を営んでいるアジア主義者・山口の、〈一人の死人で、生きているロシア人の妾を七人持てる〉という不敵な発言などにも、資本主義そのものの持つ奇妙な価値転倒の一斑がうかがえるのである。まさしく、〈ここぢや理想とか希望とか、そんなものは持ちやうが全くない。第一ここぢや、そんなものは通用しない。通用するのは金だけだ。〉という、〈金〉至上主義の地盤が、堅牢として存在するわけで、〈専務〉の〈不正〉行為も、そうした地盤の上に立つものであることを確認しておく必要がある。

参木という人物の核(コア)は、そもそも、先に見たような共同体的性格というところにあり、今は失なわれし〈道徳〉・〈愛〉・〈理想〉・〈希望〉といったものを志向する存在であったから、〈銀行〉という現代資本主義の先端機関に組み込まれ、そこで上司の〈不正〉行為に加担させられたとあらば、当然、そこに、そうとう強い拒否反応が惹きおこされるのが道理である。参木が、〈一切のことをあきらめ〉、〈いつの間にか、だんだんと死の魅力に牽かれている〉き、〈死ぬ方法〉を考え続けるといった精神的窮地に追い込まれていくのは、そうしたプロセスの顕現とみることができるだろう。本来、資本主義によって堅固に組織せられた利益社会（ゲゼルシャフト）においては、共同体（ゲマインシャフト）内でのみ通用しえた〈道徳〉・〈愛〉・〈理想〉・〈希望〉などの規範は、変質し、もしくは死に絶えてゆく運命にある。とすれば、参木は、その存在の本質的ありようと、立たされている磁場との間で、決定的に分断されてゆく命運にあるわけで、彼の精神的窮状も論理的必然であると納得することができるのである。

以上が、参木の〈道徳〉に関する途絶という点をよく物語っているとすれば、〈愛〉の途絶という点については、恋愛対象である鏡子の不在という点を無視するわけにはいかないだろう。従来の「上海」研究においては、この〈愛〉の不在という点については、あまり重きがおかれていないようだが、これは、参木という人物を理解する上で、見逃せない重要な要素の一つとなる。

参木の恋愛対象である鏡子は、実は、作品「上海」の中に一度も登場しない。兄である高重や甲谷の口を通して、間接的に、その動静が伝えられはするが、実在の鏡子は、ついに、最後まで作品中にあらわれることなく、ただ、参木の想念の中でのみ肥大化していく傾向にある。たとえば、次のような場面に留意しよう。〈肺病〉で危篤を伝えられていた鏡子の夫が死んだことを、高重から聞かされた場面である。

「鏡子の婿が死んだんだ。」／参木は急に廻転を停めた心を感じた。（中略）彼は喜びの感動とは反対に、頭を垂れた。だが、次の瞬間、彼はじりじり沈んで行く板のやうな自分を感じた。／――俺が鏡子の良人に変(ママ)るとしても、金がない。地位がない。能力がない。ただ有るものは、何の形もない愛だけだ。――（二十二）

参木の想念には、鏡子に対する〈何の形もない愛〉が過剰に渦巻いている。しかし、それは、すでに、純粋な意味での〈愛〉の発露

ではありえない。〈金〉〈地位〉〈能力〉といった現実的要素において、自己の無能を認めざるをえない参木の自己否定性の翳りが、色濃く滲み出た〈愛〉の表出でしかありえないのである。しかも、その〈愛〉は、なにひとつとして、現実に根をおろす要因を持ってはいない。あくまでも、参木のサイドからの一方的な〈何の形もない愛〉でしかないのであって、競子がそれにどう応えるかについては、何の補償もないのである。要するに、参木には、初めから、円満な愛情の補償関係が欠如している。〈愛〉は、初めから不在なのである。

このように見てくると、参木の〈あきらめ〉の内実が、かなり重いものであることがわかりかけてくる。屢述は避けるが、参木の理念とする〈道徳〉と〈愛〉とは、そのどちらもが、現代の資本主義大衆社会の縮図であるところの上海においては、全く無効化され、参木は、現実生活との間に、なにひとつとして補償関係を結びえなかったのである。このような参木の〈あきらめ〉は、あるいは、現代資本主義社会を生きる人間に普遍的に通ずる、本質的な〈あきらめ〉であると言ってもよいかもしれない。

やがて、参木は、〈銀行〉というゲゼルシャフトから逸脱し、重層構造を持つ上海の内部を彷徨し始める。むろん、それは、単なる漂泊ではない。行動理念を喪失した人間が、己れの存在基盤を求めてさまよう認識の彷徨でもあるのだ。以下では、参木の彷徨の動向を具体的に追跡し、拠って立つべき存在基盤を、参木がどこに見いだそうとしているかを検索してみるとしよう。その際に、指標となるのは、参木の〈日本〉意識の変遷というプロセスである。

二

まず、参木の当初の頃の生活のありようをうかがわせる文章を、一章から眺めておこう。

参木はひとりになると、ベンチに凭れながら古里の母のことを考へた。その苦労を続けて、なほますます優しい手紙を書いて来る母のことを。――彼はもう十年日本へ帰つたことがない。その間、彼は銀行の格子の中で、専務の食つた預金の穴をペン先で縫はされてゐただけだつた。　（一）

先にも垣間見ておいた部分だが、ここで、参木は、みずからを〈日本〉（或いは〈母〉）に繋ぎとめておく唯一の手段である〈銀行〉（ゲゼルシャフト）において、自身の理念とは対極にある〈不正〉行為に加担させられ、極度の拒否反応をしめしていた。もし、参木が、この〈専務〉の〈不正〉行為を黙認することができず、みずからの〈道徳〉を貫徹して、それを摘発するとなれば、参木は、〈日本〉というゲゼルシャフトから追放され、〈母〉へ向かって繋がれている唯一の帰路を、完全に遮断されてしまうことになるのである。それどころか、〈母国を認めずして上海でなし得る日本人の行動は、乞食と売春婦以外にはない〉という不条理にも追い込まれてしまうわけで、参木は、いまダブル・バインドの状態に立ちつくしたまま、〈死の魅力〉にとらわれ始めているといった状態なのである。

そのような彼を今のところ支えている唯一の想念は、〈俺の生きてゐるのは、孝行なのだ。俺の身体は親の身体だ、親の。俺は何んにも知るものか。〉（傍点、引用者。）という、いくぶん投げやりにも見える自己救済の想念である。ここにおいて、〈母〉（内なる

〈日本〉の像が、大きくクローズアップされてくることになる。つまり、参木は、ダブル・バインドで引き裂かれそうになった自己の存在を、〈身体〉のレベルに還元し、〈俺の身体は親の身体だ〉と想うことによって、その〈身体〉を〈母〉の懐へ還してやり、かろうじて自己を救済し、現実生活との間のバランスを保っているという按配なのである。であるから、この〈母〉のイメージは、彼が難境に追いつめられれば追いつめられるほど、次第に肥大化してゆく。そして、この〈母〉への想いとほぼ同次元のものとして、内なる〈日本〉が想起されてくることになるのである。

この内なる〈日本〉とは、〈十年〉という時間の風化のなかで、すでに実像を失っている。いわば、観念のなかで拵えあげられた幻影にすぎないわけで、だから、〈彼は、今は一切のことをあきらめて了ってゐる。――生活の騒ぎのことも、彼女のことも、日本のことも。ただ時々彼は海外から眺めてゐると、日本の着着として進歩する波動を身に感じて喜ぶことがあるだけだった。〉（一）とある時も、彼の〈喜〉びの内実は、日本の政治・経済レベルでの富国強兵、帝国主義的拡大そのものを喜ぶというよりも、喪われゆく自己の存在基盤（アイデンティティ）を強力に補償してくれるものとして、幻影を〈喜〉んでいるにすぎないのである。もし、参木が、日本の帝国主義的拡大そのものを喜んでいるとすれば、その最も先鋭的な出先機関である〈銀行〉での仕事に、もっと喜びを見いだすはずだし、少々の〈不正〉行為などで、躓いたりはしないはずである。とすれば、やはり、ここでの〈日本〉は、〈母〉と同次元にたつ幻影、もしくは、存在基盤としての内なる〈日本〉であることに留意しなくてはならない。（このことの是非については、後段でおこなう。）

しかし、現実に、参木が、〈植民地〉であり、共同租界であり、革命都市である上海の地に存在しているかぎり、囲繞する状況が、参木を、日本帝国主義に加担する一人の〈日本人〉とみなすのは避けられない事態で、参木は、必然的に、内なる〈日本〉に閉じこもっていられなくなり、〈肉体〉としての〈日本〉（客体としての〈日本〉）の問題に直面せざるをえなくなる。

……遽に彼の周囲が音響を立ち始め、投石のために窓の壊れた電車が血をつけたまま街の中から辷つて来た。それはふと彼に街のどこかの一角で、市街戦の行はれたことを響かせながら行き過ぎる。彼は再び彼自身が日本人であることを意識した。しかし、もう彼は幾度日本人であることを知らされたか。彼は、母国を肉体として現してゐることのために受ける危険が、このやうにも手近に迫つてゐる此の現象に、突然牙を生やした獣の群れを人の中から感じだした。彼は自分の身体が、母の体内から流れ出る光景と同時に、彼の今歩きつつある光景を考へた。その二つの光景の間を流れた彼の時間は、それは日本の肉体の時間にちがひないのだ。そして恐らくこれからも。しかし、彼は彼自身の心が肉体から放れて自由に彼に母国を忘れしめようとする企てを、どうすることが出来るであらう。だが、彼の肉体は外界が彼を日本人だと強ひることに反対することは出来ない。

（三十五、傍点・引用者。）

これは、作品後半で、上海に、反帝国主義・民族独立運動〈五・三〇〉事件が勃発し、〈市街戦〉が戦かわれた時の混乱の状況のなかで、参木が抱いた想念である。ここで、参木は、〈母の体内から流れ出〉てから、今まで流れていった〈時間〉の推積が、〈日本の

肉体の時間〉であったことを、改めて認識させられている。〈彼自身の心〉は、〈母〉なるイメージとしての内なる〈日本〉の胎内に閉じこもりたがっているが、その〈肉体〉は、〈母の体内〉から、すでに〈流れ出〉てしまっており、〈外界〉の〈武器〉につけ狙われる〈日本人〉としての〈肉体〉を体現していたのである。この〈肉体〉としての〈日本〉（客体としての〈日本〉）は、〈母〉なるイメージとしての内なる〈日本〉とは、当然の如く、全く異なった作用を及ぼす。後者の内なる〈日本〉は、参木がこの上海での現実生活に、なにひとつとして補償関係を見いだせなかった時の、唯一の精神的支柱となるものであったが、前者の〈肉体〉としての〈日本〉は、参木を〈外界〉の〈武器〉の前に曝させるもの、〈自殺をせしめ〉るもの、〈生活の行くさきざき〉を〈暗〉くするものとして作用するのである。

とすると、参木にとっての〈日本〉は、三つの相貌を持つものとして、現前していることがわかるだろう。一つは、〈銀行〉に象徴されるゲゼルシャフトとしての〈日本〉。これは、帝国主義的拡大を推し進めてゆく〈日本〉の像とも重なってくるものである。二つめは、参木の精神的支柱である、〈母〉なるイメージとしての内なる〈日本〉。そして、三つめが、革命都市・上海で、常に〈武器〉に標的にされる〈肉体〉としての〈日本〉ということになる。

こうした三つの相貌を持つ〈日本〉を前にして、参木は、いったい、いかなる認識を育み、どこへ辿り着こうとしているのか。以下、それぞれを、少し詳しく追ってみることにする。

三

まず、ゲゼルシャフトとしての〈日本〉を、参木は、いかように把握していたか。先に述べたように、参木は勤めていた〈銀行〉で、ゲゼルシャフト内部に巣食う〈不正〉行為に加担させられ、極度の虚無感に襲われていた。そのことに対し、参木は、八章で描かれるように、一つの〈復讐〉行為を敢行する。現金輸送車襲撃の噂が流れた時に、〈専務〉に向かって、〈今の際は銀行の危急のときです。危急のときに専務が責仕を他に転嫁させると云ふことは、専務の資格がどこにあるか分らないと思ひます。殊に此の銀行で常に一番利益を得てゐられるものは、専務です。〉とつめ寄る場面である。この時、確かに、参木の論理は、ヒエラルキーを逆用して、〈専務〉にある程度のダメージを与え得ている。そして、参木自身は、〈日頃の鬱憤を晴らした〉〈愉快〉さを、ひそかに味わっているようである。しかし、このささやかな〈復讐〉行為の報復は、当然、参木への〈解雇〉通知――ゲゼルシャフトとしての〈日本〉からの追放というかたちで仕払われることになるわけだが、そのことに対する参木の思惟は、まだ、どこか遠くを迂回しているように見受けられる。というのは、参木の行動には、自分から進んで〈銀行〉から去るといった英雄気取りの臭いが、どことなく漂っているし、〈もし復讐のために専務の預金の食ひ込みを吹聴するとすると、取付けを食ふのは分つてゐた。だが、取付けを食つて困るのは、銀行よりも預金者だつた。〉とあるように、自身の行為が、〈預金者〉の益にでもなっているかのような錯覚を抱いて、自己を正当化しているふしが見受けられるからである。しかし、どんな屁理屈をこねようとも、やがて、〈参木は河の岸で良心で復讐しようと藻掻いてゐる自分自身を発見した。これは明らかに、彼の敗北を

物語つてゐるのと同様だった。明日から、いよいよ飢餓が迫つて来るだらう。〉（傍点、引用者。）という抜き差しならない事態に追い込まれ、大きな代償を支払わなければならなくなるのである。〈良心〉の〈敗北〉の結果としての〈飢餓〉は、参木のゲマインシャフト型の性格を考える時には、ある程度の必然性をもって迫ってくるものの、それにしても、その思惟の脆弱さは気がかりである。

横光は、参木のこうしたゲマインシャフト型の〈良心〉とは対照的に、ものの見事にそれを捨て去った存在として、注意深く、甲谷なる人物を配置している。その特徴は、次のような箇所に最もよくあらわれている。参木に無償の好意を寄せるお杉に対して、乱暴をはたらいた後の彼一流の自己合理化である。

——いや、しかしだ。まアまア、五円も包んでやれば、それでお了ひさ。良心か、何もそんなことが必要なら、上海で身体をぶらぶらさせてゐる不経済な奴があるものか。——

（七、傍点・引用者。）

参木の存在のありようが、対女性関係において明瞭にあらわれていたのと同様に、甲谷のそれも、ここに露骨にあらわれている。つまり、ここには、〈良心〉イコール〈不経済〉という奇妙な等式が成りたっていて、甲谷は、〈経済〉のためなら、〈良心〉をも平気で投げうつ存在であることが理解されるのである。であるから、彼の理想とするところは、〈商業中心地帯（ビジネスセンター）〉を〈疾走〉する〈為替仲買人〉になることであり、〈巨万の富を攫〉むことなのである。甲谷の発想は、明快至極であり、ゲゼルシャフトを生きる人間として、矛盾はない。〈巨万の富〉のためには、〈不正〉行為をも辞さないし、そうした〈不正〉行為を大きく呑み込んで、おのずから生動する国際レベルでの〈経済〉の動きそのものに、彼は、強く惹きつけられているのである。こうした対蹠的存在に照らし合わせると、参木のゲマインシャフト型の〈良心〉が、いかに、脆弱なものであるかが判然としてくる。金井景子氏も指摘するように、[注3] 参木には、〈専務〉の〈不正〉行為が持っている別の側面——たとえば、〈専務〉→〈銀行〉→〈政府〉→〈日本〉と繋がるゲゼルシャフト〈日本〉の、帝国主義政策そのものの持つ〈不正〉行為を透視し、それを撃つような視点は、初めから欠落していて、ただ単に、〈専務〉一個人への私怨を晴らすという憂さばらしのレベルから抜け出せてはいないのである。しかも、その私怨の晴らし方は、〈預金者〉を救うという名目のもとに、みずからが右記のゲゼルシャフトの系列から逸脱してゆくというやり方で行なわれる。参木自身も、〈良心〉で復讐しようと藻掻いてゐる自分自身を発見〉し、〈敗北〉を認めてはいるが、こうした行為は、〈専務〉一個人に微かな打撃を与えるだけにとどまり、結果的には、ゲゼルシャフトの構造的〈不正〉の延命を促しただけのことになってしまうのである。そして、参木自身はどうなるかといえば、当然、経済的基盤を失い、〈母国を認めずして上海でなし得る日本人の行動は、乞食と売春婦以外にはない〉という状況に追い込まれるわけである。〈飢餓〉は近いと言わねばならない。

このような箇所に徴してみると、参木の思惟の持つ限界は、どうしても否定できないように思われる。つまり、参木は、上司の〈不正〉行為を嫌悪するゲマインシャフト型の〈良心〉は持ち合わせているが、その背後に隠匿されたゲゼルシャフトとしての〈日本〉の持つ構造的〈不正〉を見通す眼は所有していないのである。だか

ら、路頭に迷った参木が、次に、高重の紹介で、〈東洋綿糸会社の取引部〉というもう一つのゲゼルシャフトに職を求めるのも当然の成りゆきだと言える。逆にいえば、参木は、〈乞食と売春婦〉という極限状況を巧妙に回避したということにもなるわけで、こうしたすりかえが参木の内部で何の矛盾もなく起こりえたこと自体、この時点の参木の認識がいかに脆弱であったかを証している。もし、参木が、この上海において、自己の〈道徳〉と〈受〉とをあくまでも堅固に保持していくつもりならば、〈乞食〉に身を堕としてでも、それを体現すべきであった。それこそ、〈ドン・キホーテ〉の本来のありようであったはずである。

＊

結局、参木は、自身の拠って立つべき存在基盤を見いだせないまま、〈東洋綿糸会社〉というもう一つのゲゼルシャフトの歯車の中に組み込まれ、そこで展開される職工達の激しい反帝国主義運動の潮流の中に呑み込まれて、彼の思想的立場に根底的な揺さぶりをかけられることになる。そして、その時に、〈肉体〉としての〈日本〉（客体としての〈日本〉）の像が、大きくクローズ・アップされてくることになるわけである。

〈肉体〉としての〈日本〉は、先に見たように、参木が革命状況に巻き込まれた時に、〈外界〉によって認識させられた〈日本〉像の一つであったが、革命に直接巻き込まれる以前には、次のような形で、参木の思考回路を支配していた。銀行から追放された直後の想念である。

彼は明日から、どうして生活をするのかまだ見当さへつかないのだ。だが、さうかと云つて日本へ帰ればなほ更だつた。どこの国でも同じやうに、この支那の植民地へ集つてゐる者は、本国へ帰れば、全く生活の方法がなくなつて了つてゐた。それ故ここでは、本国から生活を奪はれた各国人の集団が寄り合ひつつ、世界で類例のない独立国を造つてゐる。だが、それぞれの人種は、余りある土貨を吸ひ合ふ本国の吸盤となつて生活してゐる。此のためここでは、一人の肉体は、いかに無為無職のものと雖も、ただ漫然とゐることでさへ、その肉体が空間を占めてゐる以上、ロシア人を除いては、愛国心の現れとなつて活動してゐるのと同様であつた。――参木はそれを思ふと笑ふのだ。（中略）だが、彼が上海にゐる以上、彼の肉体の占めてゐる空間は、統えず日本の領土となつて流れてゐるのだ。／――俺の身体は領土なんだ。此の俺の身体もお杉の身体も。――

（九、傍点・引用者。）

ここには、〈肉体〉＝〈領土〉＝〈日本〉という記号論的等式が成りたっている。この等式においては、個人の〈肉体〉すらも、一個の記号に変換され、いかなる内実を持とうとも、国家という堅牢なコード下に吸収・併合される。ここで、私達には、〈世界で類例のない独立国〉を生きる〈一人の肉体〉が、なぜ、かくも国家というコードの支配下にみずからを従属させなければならないのか、という疑問がわいてくる。それでなくとも、日本への帰路は、遮断され、個人を国家に繋縛する要素は、ほとんど見当らないのである。国家というコードから逸脱しても、個人は、その生を全うすることができたのではなかったか。（現に、お杉は、〈売春婦〉となってアンダーワールドを生きている。）

もちろん、上海という異国の環境が、そうした事態を強要してくるということも充分考えられる。しかし、ここでは、参木の認識のありようそのものを問題としなくてはならない。つまり、なぜ、参木は、自身の〈肉体〉を、〈領土〉・〈国家〉に繋縛する方向で、自己の存在を規定していったのかということである。それは、一つには、参木の立たされた状況が、ゲゼルシャフトからの放逐、経済的基盤の喪失、という極限的なそれであったことを考え合わせねばなるまい。極限的な状況下にあって、先程の〈肉体〉＝〈領土〉＝〈日本〉という論理は、参木にとっての一種の救いであったに相違ないのである。自己を〈肉体〉の記号レベルに還元してしまって、〈日本の領土〉に繋ぎとめることにより、わずかにアイデンティティを保持しようとする発想だと言ってよいだろう。それは、日本への帰路が遮断されていればいるほど、あるいは、〈世界で類例のない独立国〉に生きることを強いられれば強いられるほど、逆に、参木に強く湧き起こってくる心性でもあったと推測されるのである。

しかし、視点を転じて言えば、ここには、先に触れた参木の母なるイメージとしての内なる〈日本〉と、〈肉体〉としての〈日本〉との、奇妙な癒着現象が生じてしまっているのである。現実生活との間に、何ひとつとして補償関係を結びえなかった参木の精神的な支柱となった、母なるイメージとしての内なる〈日本〉は、本来の姿としては、国家的色彩に彩られない幻影としての心の支えであったが、ゲゼルシャフトとしての〈日本〉から追放された今、〈肉体〉＝〈領土〉＝〈日本〉＝〈母〉という論理が形成されていったと見ることができるのである。ここでは、すでに、母なるイメージとしての内なる〈日本〉は、自身の〈肉体〉を包摂する〈領土〉としての〈日本〉に、いつの間にか変質し、奇妙に癒着してしまっている。参木のゲマインシャフト（共同体）型の存在のありようを考え合わせる時、そうした道筋は、ある程度、必然的な志向として把握できそうだが、それが、先にも見た参木の思惟の限界とも通底していることは言うまでもない。参木は、基本的には、自己を包摂してくれる共同体を欲しているのである。

しかし、ここで参木は、まだ、そうした自分の論理自体を、〈笑〉ってもいる。〈肉体〉＝〈領土〉＝〈日本〉＝〈母〉という論理自体の短絡さを自虐的に〈笑〉いつつも、その論理にすがりつこうとしている参木が見えるのである。

こうした短絡的論理は、しかし、作品後半で、反帝国主義・民族解放運動が、この上海を革命都市へと変貌させた時、全く逆転して、参木に復讐を開始する。それが、本稿二節でも引用しておいた三十五章の記述である。引用の重複は避けるが、〈肉体〉としての〈日本〉は、参木を、〈外界〉の〈武器〉の前に曝させるもの、〈自殺をせしめ〉るもの、〈生活の行くささぎざ〉を〈暗〉くするものとして作用し、ついには、〈飢ゑ〉を強いるものとして迫ってくるようになる。

> 或る日、参木と甲谷はいつもの店へ食事をしに出て行くともう食料がなくなつたといつて拒絶された。米をひそかに運んでゐた支那人が発見されて殺されたと云ふ。それに卵もなければ肉もなかつた。勿論、野菜類にいたつては、欠乏しなければ不思議であつた。（中略）……参木には昨夜からの空腹が、彼の頭にまで攻め昇るのを感じた。すると、彼は彼をして空腹ならし

めてゐるものが、ただ僅に自身の身体であることに気がついた。もし今彼の身体が支那人なら、彼は手を動かせば食へるのだ。それに――彼は領土が、鉄よりも堅牢に、自身の肉体の中を貫いてゐるのを感じないわけにはいかなかつた。

（四〇、傍点・引用者。）

〈肉体〉を〈鉄よりも堅牢〉に貫いている〈領土〉＝〈日本〉が、この局面では、参木を極度の〈空腹〉に追い込み、やがては、食料を求めて、〈暴徒の出没する危険区画〉にまで踏み出させるようになっていく。これは、もはや〈死〉と隣りあわせの一種の限界状況ということができる。ここでは、先の〈肉体〉＝〈領土〉＝〈日本〉＝〈母〉という論理が、逆に作用して、参木に根底的な危難を加えていると見ることができる。先に指摘した、母なるイメージとしての内なる〈日本〉と、〈肉体〉を包摂する〈領土〉としての〈日本〉との癒着の結果が、いま再び検討されねばならない磁場に、参木は立たされているということにもなろう。いまや、〈肉体〉としての〈日本〉は、〈死〉の臭いすら漂わせているのであるから。

では、参木は、いったいいかなる場所に辿り着こうとしているのか。〈飢ゑ〉と〈死〉との恐怖の中で、参木は、次に、重要な変化を見せる。〈罷市〉の街を彷徨していた彼が、〈支那〉の暴漢に川の中へ放り込まれ、〈排泄物〉を積んだ汚穢舟の中に身を沈めた時の想念である。

――ああ、しかし、船いつぱいに詰つた此の肥料の匂ひ――此れは日本の故郷の匂ひだ。故郷では母親は今頃は、緑青の吹いた眼鏡に糸を巻きつけて足袋の底でも縫つてるだらう。恐らく彼女は俺が、今ここのこの舟の中へ落つこつてゐることなんか、夢にも知るまい。

（四五）

ここで、参木は、都市の最深部である〈排泄物〉の中に身を沈め、その〈肥料の匂ひ〉から、〈日本の故郷の匂ひ〉を連想すると同時に、〈母親〉をイメージしている。〈飢ゑ〉という肉体的窮乏を伴って、嗅覚から探りあてた根源的な〈日本〉のイメージの発見であると言ってよい。つまり、〈母〉のイメージと同次元の内なる〈故郷〉としての〈日本〉の像なのである。この像は、先に見た〈母〉なるイメージとしての内なる〈日本〉像と同一のものではあるが、ここでは、〈肉体〉を包摂する〈領土〉としての〈日本〉概念は、全く捨象されていて、そのイメージの鮮明さ、強烈さは、先に見たものとは較ぶべくもない。

屢述するなら、〈飢ゑ〉と〈死〉に瀕し、〈排泄物〉という都市の最深部にまで沈み込んだ時に、その〈身体〉感覚と嗅覚とで、初めて明確にイメージしえたのが、〈故郷〉・〈母〉としての〈日本〉であったということになる。ここに示されている〈日本〉は、もちろん、国家としての実体は伴っていない。しかし、現実には、帝国主義拡大を企図する日本国家が存在し続けるのは、自明のことなので、参木が〈故郷〉・〈母〉としての〈日本〉の内部に閉じこもっていられなくなる事態が、再び出現するようなことがあるかもしれない。また、日本国家が、一つの心的共同体（ゲマインシャフト）の相貌をもって、参木の前に立ちあらわれ、参木の〈故郷〉・〈母〉としての〈日本〉を包摂してしまうような事態が出現することもあるかもしれない。だが、そうした危険性を常に背負ったものであることを充分認めたうえでも、参木が、〈今ここ〉で確認しえ

た〈故郷〉・〈母〉としての根源的な〈日本〉像は、アイデンティティ・クライシスに陥った資本主義大衆社会を生きる現代人の存在基盤の模索形態としては、一つのポジティブな答案であったと考えることができるのである。参木は、退転しつつも、根源に辿りついたということができるのである。

四

しかし、昭和文学の動向を追っていく際に、当然、問題は、ここで終わってしまうことはできない。参木の辿りついた〈故郷〉・〈母〉としての根源的イメージと、あの忌わしきゲマインシャフト大東亜共栄圏構想との間の距離の測定や、いつそれが交錯し、変質していったかという時間的経過等が、重要な課題として残されることになるのである。それらについては、後日の考察に譲るしかないが、少なくともここで確認しておきたいのは、参木という人物を通して試みられた、知識人の拠って立つべき存在基盤の模索に対する一つの答案として、横光は、〈故郷〉・〈母〉と同次元の根源としての〈日本〉というイメージを提出しようとしているという点である。この場合の〈日本〉とは、国家的色彩を帯びてはいない。〈肥料の匂ひ〉に象徴されるような実体なき茫漠たるイメージの集合体なのである。それは、知識・概念レベルの思考というよりは、〈身体〉レベルの深みに降りたった実存的な思考ということができる。横光は、昭和六年あたりを転機に、人間存在を実存のレベルでとらえ始めようとしていた。(注4) この根源志向・実存志向という方向性が、〝主体回復〟の試みの一つの曙光のようなものとして、横光の内部に定着しつつあったと考えてよいように思われる。以上が、参木を通して得られた本稿の結論のようなものである。

最後に、作品「上海」についての重要なポイントを、もう一点、指摘しておかなくてはならない。それは、今まで述べてきたことと矛盾する結果になるかもしれないが、本稿で中心に論じてきた参木の認識の彷徨とその結実とが、実は、作品内部で、お杉という存在によって、相対化されてしまっているという事実である。この点については、別稿で論じたので(注5)、詳しくは、それを参照していただきたいが、お杉なる存在は、参木と同様、ゲゼルシャフトとしての〈日本〉から放逐され、〈売春婦〉と〈乞食〉しか進む道がない極限状況に追い込まれた時、ほかに術なく、ついに〈売春婦〉として生きるべく運命を決定づけられてしまった存在であった。別のゲゼルシャフトに身を寄せてしまった参木とは異なり、その身を上海の最底辺にまで堕とし、〈支那〉民衆と同位相にまで降り立ってしまった存在でもあった。そのお杉の眼に映じたものは、まどうかたなき暴力装置としての〈日本〉国家であり、参木が想念していた〈故郷〉・〈母〉に通ずる根源的イメージの〈日本〉の背後に隠された真の相貌を、確実に照らし出していたのだった。

横光は、参木を通じて、知識人の拠って立つべき存在基盤を追究し、それにある一つの解答らしきものを与えつつも、一方で、それを相対化する別の視点を持っていたということになる。横光の〝主体回復〟の試みは、まだ、結論にはほど遠いところで錯綜していたようである。

注

(1)、〝〈街〉もの〟には、「表現派の役者」、「街の底」（以上、大正14）、「朦朧とした風」、「七階の運動」（以上、昭和2）、「或る職工の手記」（昭和3）などが含まれる。その特質については、拙稿「横光利一『街の底』論――新感覚派文学の内実と意味――」（『近代文学試論』、昭59・12）で論じた。なお、この命名は、私に付したものである。

(2)、参木の対極に立つ人物として、友人の甲谷がいるが、この人物は、後述するごとく、ゲゼルシャフトを生きる人間として矛盾はない。そのゲゼルシャフトを登りつめることに、甲谷は、喜びを見いだしている。

(3)、金井景子「租界人の文学――横光利一『上海』論――」（紅野敏郎編『新感覚派の文学世界』、昭57・11・23、名著刊行会、所収。）

(4)、この傾向を如実に示す作品に、昭和六年の「時間」がある。ここで、横光は、既存の秩序を剝ぎとった、実存としての人間存在を追究している。詳しくは、拙稿「横光利一『時間』論――『機械』からの変質――」（『山口国文』、昭58・3）を参照していただきたい。

(5)、拙稿「横光利一『上海』論の試み(一)――娼婦〈お杉〉の意味――」（『近代文学試論』、昭60・12）

（一九八五年一一月二九日稿了）

付記

「上海」のテキストは、河出書房新社版『定本・横光利一全集』に拠った。仮名遣いは原文のまま、漢字は現行の字体に改めている。

――広島大学大学院博士課程後期在学――